ビギナーズ・クラシックス 日本の古典

源氏物語

紫式部

角川書店＝編

角川文庫
12241

◆はじめに◆

『源氏物語』は、世界に誇る日本古典の代表として、小学生でさえ知っているほど有名です。しかも、現在、一大『源氏物語』ブームです。

ところが、その全文を読み通した読者は、少数の研究者を除けば、ゼロといってよいでしょう。驚くことに、古語の原典ではなく現代語訳したものでも、全文を読破した人は、めったにいません。有名無実とは、まさにこのことです。

時代が古すぎるからでしょうか。それとも、作品が長すぎるからでしょうか。いいえ、どちらでもありません。その理由をたずねると、ほとんどの人が次のように答えました。

主語が不明確で、だれが何をしているのか、あいまいだ。また、現代感覚になじまない敬語に覆われて、違和感を覚えるから、たいくつだ。

要するに、読者は、自分の心のなかに『源氏物語』の像を結ぶことができないのです。これでは、読めない読みたくない古典は、ますます読まなくなってしまうで

しょう。

しかし、主語の省略も複雑な敬語も、当時の貴族社会では、何の違和感もなく、自然でした。その自然さを、逆に現代においても保証しない限り、読みにくさは解消しません。

では、どうすれば私たちにとって、自然な日常語になるのでしょうか。

そこで、本書は、読者のみなさんが、ふだんの言葉で、いつもの目線で、心のなかに登場人物や場面をはっきりと描けるように、主語を明確にし、特殊な敬語をとりはずしました。さらに語釈のたぐいもはぶきました。

その代わり、すらすら読んで、すみやかに、自分の『源氏物語』像を心に結ぶことができるように、「あらすじ」や全帖（ぜんじょう）から場面を抜粋した「通釈」（意訳＋説明）・「原文」を配し、総ルビ（振り仮名）をつけ、最後に寸評を添えました。

まず、あらすじや通釈を読みながら、想像力を働かせて、人物や場面を心に描きましょう。それから、原文を音読して、王朝ロマンの香りを十分に吸い込みます。その後、時間があったら、寸評を読み流してみてください。目の前に、みなさん自

身が彩色した『源氏物語』の世界が立ち現れてくるはずです。

本書は、注釈書でもいわゆる現代語訳でもありません。むしろ、それらと読者のみなさんとの間を取り持つ前座（ぜんざ）のような案内役をつとめるのが目的です。

本書を読んだ後で、より深い理解をめざして注釈書を手に取ることになるならば、古典軽視の風潮に一矢を報いんとする本書の志は遂げられたことになります。その時の至らんことを、心から願ってやみません。

平成十三年十月

古典茶房　武田 友宏

協力　鈴木泰則　鈴木重寿　前田恵美

●原文は、角川文庫版『源氏物語』に拠り、適宜表記を改めた。また、『絵入源氏物語』の挿絵は、『源氏物語評釈』（角川書店刊）から採った。

●本書は、先に刊行したミニ文庫（ミニ・クラシックス）を増訂したものである。

◇編集協力

・本文デザイン……代田　奨

・『源氏物語絵巻』作図……須貝　稔

・地図制作……オゾングラフィックス

◇資料提供協力

口絵・伝狩野養信筆『初音』衝立……石山寺

・佐多芳郎画『浮舟』……佐多芳彦・大佛次郎記念館

本文・土佐光起筆『紫式部画像』……石山寺

・伝狩野山楽筆『車争図屏風』……東京国立博物館

・安田靫彦筆『御産の禱』……東京国立博物館

・能「葵の上」舞台写真……堀上　謙

・「六条院全景模型」……（考証・製作）中部大学池浩三研究室

（敬称略）

◆目次◆

一 桐壺（きりつぼ） 15
◈光源氏の母 18
◈光源氏の誕生と気丈な祖母 21
◈陰湿ないじめ 24
◈若宮の将来を予言 26
◈亡き母の面影通う継母 28
二 帚木（ははきぎ） 31
◈妻選びの難しさ 33
◈浮気封じのこつ 36
◈人妻にしかける恋 38
三 空蟬（うつせみ） 41
◈忍んだ相手は人違い 43
四 夕顔（ゆうがお） 47
◈夕顔を襲う美女の生き霊 49
五 若紫（わかむらさき） 53
◈藤壺の面影を宿した少女 55
◈継母、藤壺中宮との秘め事 58
◈若紫はかわいいお人形さん 61
六 末摘花（すえつむはな） 65
◈古風で純真な赤鼻の姫君 67
◈超美少女の幼妻 70
七 紅葉賀（もみじのが） 77
◈禁断の愛に揺れる女心 79
◈許されざる恋の形見 83

◈好色な老女官をめぐる恋のさやあて 86
八　花宴（はなのえん） 91
◈おぼろ月夜の危険な情事 93
九　葵（あおい） 97
◈車争い 100
◈葵の上にとりつく生き霊の声 104
◈体に染みついた芥子の香 109
十　賢木（さかき） 113
◈不倫の露見 115
十一　花散里（はちるさと） 121
◈心の憩う女 123
十二　須磨（すま） 125
◈須磨退居の決意 127
◈須磨のわび住まい 129
◈入道夫妻の意見の衝突 131
十三　明石（あかし） 135
◈父桐壺院の亡霊出現 137
◈明石の君との一夜 140
十四　澪標（みおつくし） 145
◈紫の上の嫉妬 147
◈源氏の威勢 149
十五　蓬生（よもぎう） 153
◈荒れはてた常陸の宮邸 155
十六　関屋（せきや） 159
◈源氏との偶然の再会 161
十七　絵合（えあわせ） 165
◈絵合の決勝 167
十八　松風（まつかぜ） 171
◈上京した明石の君母子 173

十九　薄雲（うすぐも）　177
◈明石の姫君を愛育する紫の上　179
◈死の床で尽きぬ嘆き　181
◈二人の秘密を帝に告白する僧都　184
二十　朝顔（あさがお）　189
◈朝顔の姫宮のうわさと紫の上の煩悶　191
◈藤壺、夢に現れて霊界の苦悩を訴える　192
二十一　乙女（おとめ）　195
◈源氏の教育観　198
◈夕霧と雲居の雁の清純な恋　202
二十二　玉鬘（たまかずら）　205
◈紫の上に夕顔との過去を告白　207
二十三　初音（はつね）　211
◈朝帰りの言いわけ　213
二十四　胡蝶（こちょう）　217
◈養父の邪恋　219
二十五　蛍（ほたる）　223
◈文学論　225
二十六　常夏（とこなつ）　231
◈舌のよく回る今姫君　233
二十七　篝火（かがりび）　237
◈琴を枕に寄り添う父娘　239
二十八　野分（のわき）　241
◈春の曙、霞に咲きこぼれる樺桜　243
◈夕日に輝く八重山吹の花　246
二十九　行幸（みゆき）　249
◈玉鬘の真相を告白　251

三十　藤袴（ふじばかま）　255
◈玉鬘をめぐる父子の会話　257
三十一　真木柱（まきばしら）　261
◈狂恋の夫に香炉を投げつける　263
三十二　梅枝（うめがえ）　269
◈源氏の結婚観　271
三十三　藤裏葉（ふじのうらば）　275
◈六年越しの恋実る　277
◈二人の母の対面　280
三十四　若菜上（わかなのじょう）　283
◈新妻のもとに夫を送り出す　285
◈女三の宮をかいま見た柏木　289
三十五　若菜下（わかなのげ）　295
◈独り寝の夜の独白　297
◈柏木の恋文を発見　300
◈柏木の心を砕く一撃　301
三十六　柏木（かしわぎ）　305
◈薫の君の誕生　308
◈源氏を恐れる病床の柏木　310
三十七　横笛（よこぶえ）　313
◈無心に這い回る薫　315
◈柏木の霊あらわる　317
三十八　鈴虫（すずむし）　323
◈鈴虫の声に託した未練　325
三十九　夕霧（ゆうぎり）　333
◈夫から手紙を奪取する妻　335
◈夫を拒否する妻の反撃　339
◈亡夫の親友と結ばれて　342
四十　御法（みのり）　345
◈おばあちゃん子の匂宮　347

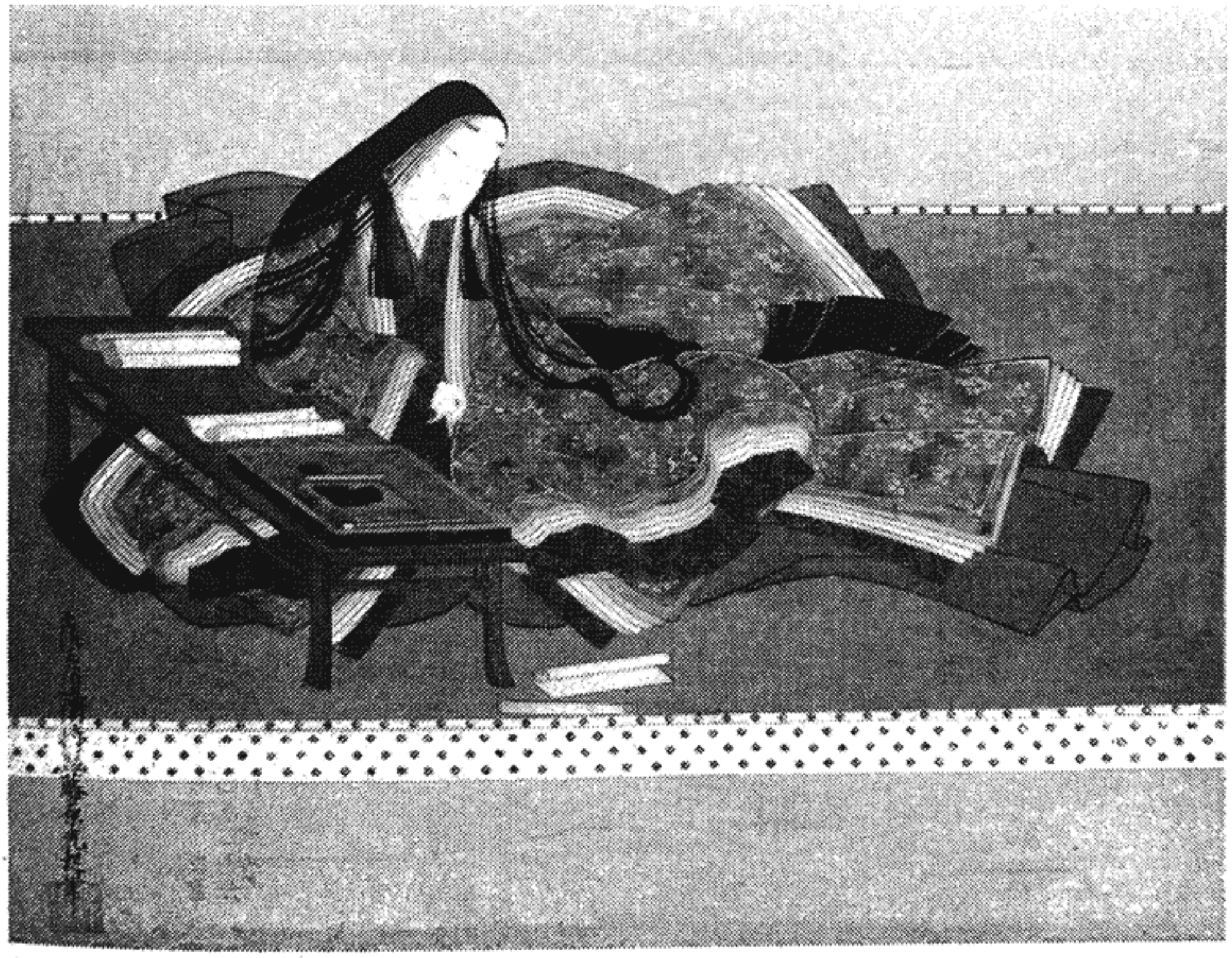
◈無上に美しく　349
四十一　幻（まぼろし）　353
◈秘蔵の手紙を処分する　354
「❀　雲隠（くもがくれ）」　359
四十二　匂兵部卿（におうひょうぶきょう）　361
◈薫の芳香　362
◈匂宮の芳香　365
四十三　紅梅（こうばい）　369
◈光源氏の追憶　371
四十四　竹河（たけかわ）　375
◈娘の不運な結婚　378
四十五　橋姫（はしひめ）　381
◈月を見上げる姫君姉妹　383
◈亡き父柏木の秘文を読む　387
四十六　椎本（しいがもと）　391
◈姫君たちへの教訓　393
四十七　総角（あげまき）　397
◈侍女たちの作戦　399
◈侍女たちの専横　401
四十八　早蕨（さわらび）　405
◈亡き姉の大君をしのぶ　407
四十九　宿木（やどりぎ）　411
◈上京した浮舟のうわさ　414
◈浮舟をかいま見る薫　416
五十　東屋（あずまや）　419
◈夫選びのこつ　422
五十一　浮舟（うきふね）　425
◈薫をよそおい浮舟を奪う　427
◈甘美な恋に酔いしれる　431
◈三角関係の清算　434

五十二　蜻蛉（かげろう）　437
◈姫君が消えた朝　439
◈半信半疑の対話　441
五十三　手習（てならい）　445
◈宇治の森の白い妖怪　447
◈失踪の夜の記憶　450
五十四　夢浮橋（ゆめのうきはし）　455
◈出家した浮舟　457

解説
『源氏物語』――作品紹介　461
紫式部――作者紹介　466

付録
『源氏物語』探求情報　468
紫式部系図
紫式部略年譜
『源氏物語』関係系図
『源氏物語』略年表
内裏図
主要建物推定位置図
源氏物語関係略図
（参考）六条院全景図（模型）　197

コラム　索引　143
「明石」の意味　383
「宇治」と「憂し」　248
空蟬　18
薫と匂――追風用意　330
方違え　21
賀茂祭　33
貴族女性のメーク　443
源氏香の図――匂いと薫りの結晶　152
源の典侍は紫式部の兄嫁か？　170
原文の読みかた――歴史的仮名遣　52
いの発音　201
鈴虫と松虫　64
「須磨」の意味　134
青海波（舞楽）　83
成人式――元服・裳着　248
壺――藤壺・桐壺　18
二千円札の裏――『源氏物語絵巻』・『鈴虫』の詞書から　330
女御・更衣　21
帚木　33
比叡山と浮舟　443
「澪標」と「身を尽くし」　152
紫のゆかり①　63　②　304　170
物合の伝統　52
物の怪　201
大和魂　64
「御」はどう読むか？



〈土佐光起筆『紫式部画像』〉

一

◈桐壺（きりつぼ）

❖巻名の由来

「御局（みつぼね）は桐壺（きりつぼ）なり」本文中の記事による。桐壺は内裏の東北隅にある淑景舎（しげいしゃ）の別称。

❖主要人物の年齢

・源氏―誕生～12歳
・藤壺（ふじつぼ）―6～17歳
・葵（あおい）の上―5～16歳

あらすじ

桐壺の更衣は、桐壺の帝の寵愛を独り占めにしていた。ほかの妃たちはこれを許さず、嫉妬し迫害した。父大納言の亡き後、更衣の母北の方の苦労は絶えることがない。

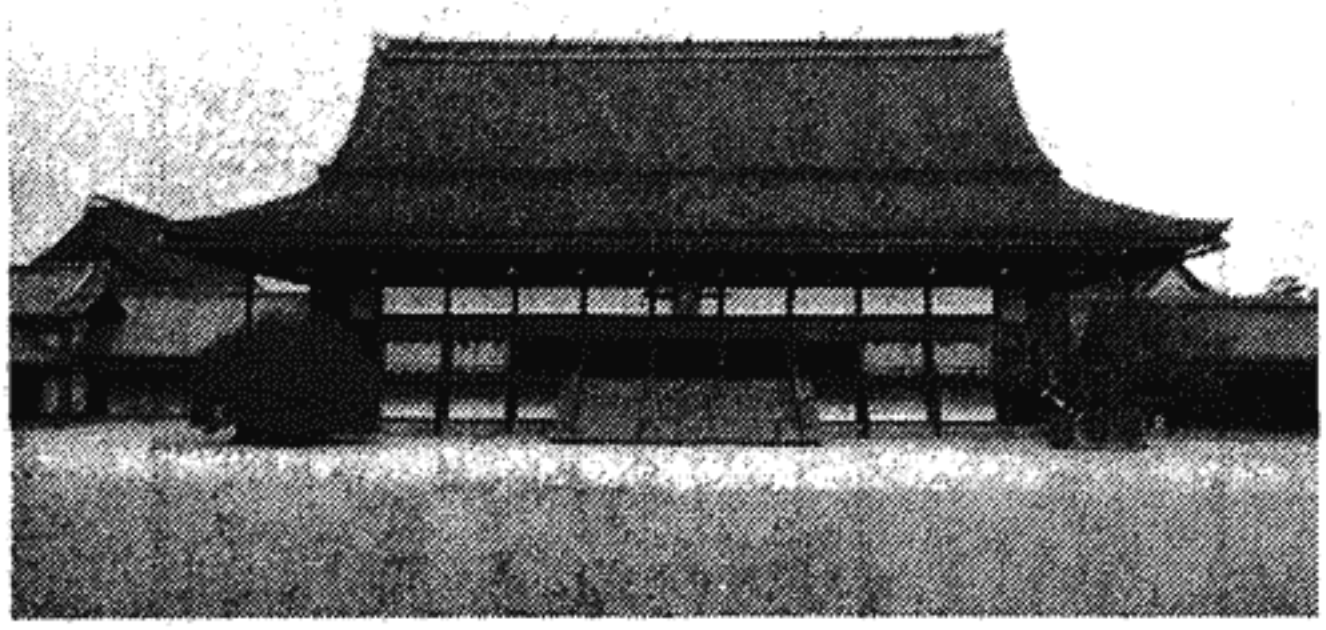
そんな中で、桐壺の更衣は、美しい皇子（光源氏）を生み、寵愛はますます深まっていく。第一皇子の母、弘徽殿の女御をはじめ、妃たちのいじめもいっそう激しくなる。心身ともに疲れ切った更衣は、病のため実家に帰り、ふたたび宮中に戻ることはなかった。源氏三歳のことである。帝と母北の方の悲嘆はたとえようもない。

母北の方（源氏の祖母）は源氏六歳の時に死去し、その後、身よりのない源氏は宮中に引き取られて成長する。七歳で教育を受け始めたが、学問も芸能も並みはずれて優秀な源氏に、父帝は期待をかける。しかし、高麗（朝鮮の王朝の名）人の観相（運命判断）に従い、皇族から臣下に降し源氏姓を与えた。新しく藤壺の女御が妃として迎えられた。女御は、源氏の亡き母桐壺の更衣

に生き写しの美貌と評判された。源氏はひそかに慕情を寄せる。十二歳、源氏は元服し、左大臣の姫君葵の上と結婚した。彼女は四歳年上で、とりすました美貌に源氏は愛情がわかない。いよいよ藤壺への恋慕にのめりこんでいった。世の人々は二人の美貌と寵愛を讃えて、源氏を「光る君」、藤壺を「輝く日の宮」と呼んだ。

源氏は、亡き母の殿舎（桐壺）を自室にし、母の実家を改築する。のちの二条院である。源氏は、理想の女性と住むことを夢見る。

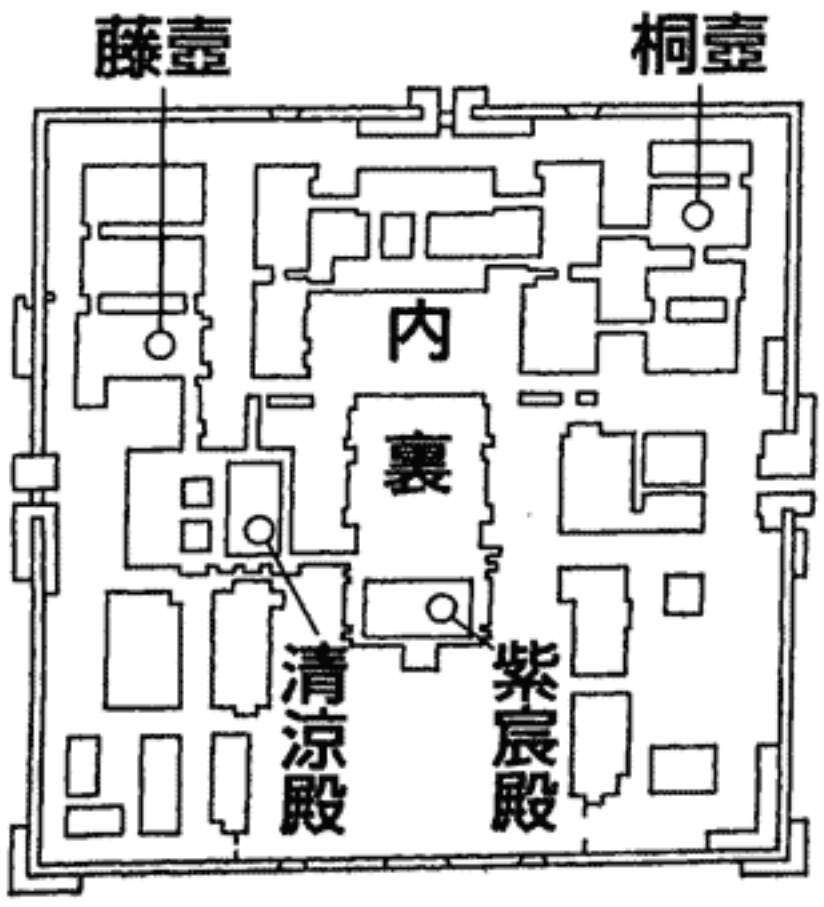
源氏は、宮中と自邸を自由に往き来できる特権を許された。こうして、物語の展開に必要な条件が整っていく。



〈紫宸殿(京都御所)〉

★壺（つぼ）——藤壺（ふじつぼ）・桐壺（きりつぼ）

「壺」とは中庭のことである。「藤壺」は中庭に藤が植えてある殿舎の名であり、「桐壺」は桐を植えた殿舎をいう。正式名称を、それぞれ「飛香舎（ひぎょうしゃ）」「淑景舎（しげいしゃ）」といい、天皇のお妃（きさき）が住み、妃の呼び名にも使用された。妃のランクによって、天皇の居間からの遠近が決まる。桐壺は最も遠い位置にあり、源氏の母、桐壺の更衣は、そこから長い廊下をたどらなければお目通りできなかったのだ。



→付録「内裏図」

◆光源氏（ひかるげんじ）の母（はは）——ならびなき寵愛（ちょうあい）

どの帝（みかど）のころだったか、女御（にょうご）や更衣（こうい）と呼（よ）ばれる何人（なんにん）もの妃（きさき）が仕（つか）えていた、その中（なか）に、女御（にょうご）よりは下位（かい）の更衣（こうい）で、帝（みかど）の寵愛（ちょうあい）を独（ひと）り占（じ）めしている妃（きさき）がい

た。

自分こそ第一の妃と、うぬぼれていた女御たちは、下位の更衣に出し抜かれて、嫉妬のあまりに、さまざまな嫌がらせをした。更衣を見下すことができる上位の女御でさえこの調子だったから、まして同格の更衣やそれより下位の妃たちは、公然たる対抗手段もないまま、いらいらするばかりだった。

帝と過ごす夜の御殿と、自分の部屋の間の往復は、他の妃たちの部屋の前を通らなければならないので、当然、彼女たちの神経はとがった。やがて積もり積もった嫉妬のせいか、更衣は、病気がちで生気をなくし、実家に帰ることが多くなった。そうなれば帝は、いよいよ愛着をつのらせ、周りの忠告も耳に入らない。後世に悪例を残しそうな特別待遇を続けた。妃たちだけでなく、側近の高官たちでさえ、苦々しげに顔をそむけるほどの寵愛ぶりだった。

❖いづれの御時にか、女御・更衣あまた侍ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり。

初めより我はと思ひ上がり給へる御方々、めざましき者におとしめそねみ給ふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず、朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれなるものにおぼほして、人のそしりをもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部・上人なども、あいなく目をそばめつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。

✽ここから、『源氏物語』全編の幕開けである。まず源氏の父桐壺の帝と母桐壺の更衣が紹介される。帝の偏った寵愛は宮中を揺るがす事件となった。周囲に歓迎されない熱愛、これが長大な物語の発端となる。人の一生を愛の葛藤劇とみる人生観は、古くて新しい。

★**女御・更衣**

女御・更衣は、天皇に仕える高位の女官だが、実質は天皇の妻（妃）である。女御は皇族や大臣家以上の家柄の出身、更衣は女御に次ぐ家柄から出た。皇后はふつう女御から選ばれた。ちなみに、桐壺帝のモデルとされる醍醐天皇には、女御五人、更衣十九人が仕えていたという。内裏の中には、妃たちとそれに仕える女官たちが居住する殿舎群があり、後宮と呼ばれた。女性の数は全部で数百人から、最盛時には千人を越えた。

◈

光源氏の誕生と気丈な祖母

更衣の父の大納言は亡くなったが、母の北の方は旧家の出身で格式を重んじる人だけに、両親がそろい世間の名声華やかな妃たちに負けないように、女親の意地を通してきた。

宮中の儀式には、娘の更衣はもとより、お付きの女房の衣装などにも、入念に心配りした。それでも、男親に代わる後見人がいないため、盛大な式典などでは、影が薄くなってしまうのだった。

やがて、帝と更衣の間には、前世からの深い縁もあってか、この世のものとも思えないほど、美しい玉のような皇子（光源氏）まで生まれた。帝は若宮を早く見たくてたまらず、急いで更衣の実家から宮中に連れて来させた。見ると、驚くほど美しくかわいい顔だちである。

一方、この皇子の兄宮にあたる第一皇子（のちの朱雀帝）は、右大臣の姫君、弘徽殿の女御が生んだ人で、皇子の祖父は、政界の実力者で後押しが強力だったから、間違いなく皇太子になると信じられ、誰もがうやうやしく仕えていた。しかし、この弟宮の輝くばかりの美しさにはとてもかなわない。更衣を愛する帝は、兄宮にはそれなりの愛情を示すだけで、弟の若宮のほうを秘蔵っ子として溺愛した。

❖父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、古の人の由あるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何ごとの儀式をもてなし給ひけれど、取り立ててはかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほ拠り所なく心細げなり。

前の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、珍らかなる児の御容貌なり。

一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづききこゆれど、この御匂ひには並び給ふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。

✽源氏の祖母である北の方が、亡夫の遺言を守ろうと女の意地を貫く。虚偽と虚飾の渦巻く後宮で、娘を支える女親の胸には、家を守る執念が燃えている。これが一家の主婦の真の姿ともいえる。